



特集

# 「小6合判模試」**1**

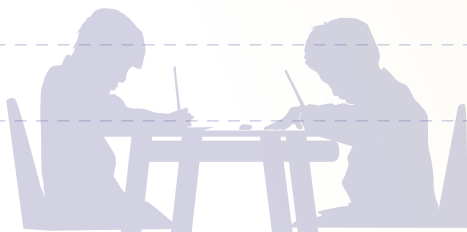
中学入試レポート vol. **1**

## 保護者の意識と教育の変化から 多様化した入試に チャンスを見出す!

～ 2020年入試結果から探る、2021年首都圏中学入試展望～

皆さんの先輩にあたる受験生と保護者が、今春2020年の首都圏中学入試に親子で挑んだのが1月～2月。すでに約3ヶ月が過ぎた。この間、新型コロナウイルス対策で小学校も休みになるなど、新6年生の皆さんにとっては、大変な新年度のスタートとなったが、来年入試に向けて、気持ちを新たに受験勉強と準備を進めてほしいところだ。

今回は、新6年生になった皆さんが迎える、初めての小6「中学受験合判模試」。ここでは、この2020年の人気動向から読み取ることができる、来春2021年入試の展望をお伝えしよう。



首都圏模試センター

## 首都圏の私立・国立中の受験者総数は 6年続きで増加して、「49,400名」に!

今春2020年の首都圏中学入試における私立・国立中学校の受験者数は、首都圏模試センターの推定では49,400名となった。前年2019年の47,200名から2,200名の増加。受験者数と受験率を示す下記のグラフが示すように、これで6年続きの受験者増となった。

2008年のリーマン・ショック後、年々減少してきた中学受験生数は、2014年を境に上昇に転じ、増加傾向が続いてきた。

この増加の理由には、やはり今後の「大学入試改革」と「日本の教育の変化」がある。約1年後に迫った2020年度からの「大学入試改革」は、当初の予定よりも実質先送りになったが、今春2020年の中学入試に挑んだ現中学1年生が大学入試を迎えるのは、すでに2025年度。このときには大学入試のあり方が大きく変わることは間違いない。さらに大切なことは、大学入試のあり方が変わるばかりではなく、現在の小学校6年生以下子どもたちが社会に出る2030年以降の日本の社会と人々の生き方は、現在とは大きく変化することが予測されている。

かつてアメリカの教育学者キャシー・デビットソン氏（当時ニューヨーク市立大学教授）は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時（2027年）に今は存在していない職業に就くだろうと予測し、マイ



新校舎建築中のため、例年とは違った流れで実施された開成中の入試。

ケル・A・オズボーン氏（当時オックスフォード大学准教授）は、「今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」と予測した。

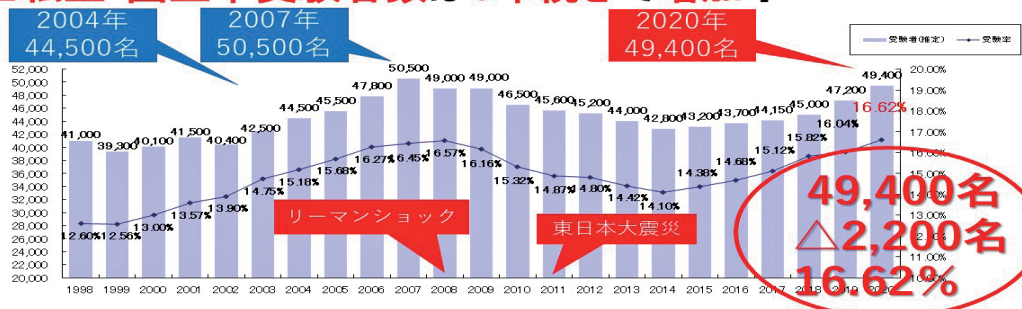
そして前者の言う「2011年度にアメリカの小学校に入学した」子どもたちとは、すでに現在の高校1年生。後者が予測した未来は、まさにこの世代の小・中・高校生が当事者であり、この指摘は彼ら彼女らが大学や大学院を卒業して社会に出る時代を予測したものだ。

そして2030年には、「SDGs（＝国連グローバルゴールズ）」の目標達成年度を迎える。いま世界中の学校で生徒たちがこの「SDGs」に取り組んでいるのは、自分たちが社会の中軸を担う時代に、自分たちの暮らす地球環境を守り、より良い社会を築いていくために必須の活動に他ならない。

さらに、現在の小学校6年生が37歳になる2045年頃には、「AI（人工知能）の能力が人間を超える」シンギュラリティ（技術的特異点）という分岐点を迎えるといわれている。

## 2020年中学入試はどうなったか？

### ■私立・国立中受験者数は6年続きで増加！



ピーク時から徐々に減少してきた中学受験者数は、2014年を境に下げ止まり、2015年～2020年にかけて「6年続き」で増加へ！



急速に進むグローバル化、ボーダレス化とAI(人工知能)の進化によって、現代の子どもたちは今後「答えがひとつに定まらない(=正解のない)」人類的な課題と向き合い、その解決の糸口を探っていかななくてはならない世代なのだ。

そのように「今後(未来)の社会が変わり、そこで求められる力が変わり、大学入試も変わる」と言われる時代に、子どもたちが未来の社会でより良く生きていくために必要な力を考えたときに、中学受験生の「学校選び」の観点も少しずつ変わってきて当然だろう。

同時に、今後の「変わる大学入試と日本の教育」への対応の必要性から、自校の教育にも探究学習・アクティブラーニングの導入や「21世紀型スキル」の育成を積極的に打ち出す私立中学校・中高一貫校も急速に増えてきた。そうした傾向や方向性が中学入試にも色濃く反映された側面が、今春2020年の首都圏中学入試でもさらに目立つようになった「私立中入試の多様化」に他ならない。

### 小学生と保護者の多様な視点と価値観が今春2020年入試の人気動向を左右した！

そうした今春2020年の首都圏中学入試で目立たいくつかのトピックスを8ページのコラムでご紹介しておこう。

そこに紹介した数々の傾向や人気動向は、いずれも今後の「大学入試と日本の教育の変化」と密接に関わっている。

そうした先の変化を見据えて、受験生(小学生)と保護者が、多様な視点と価値観で、それぞれの受験校を選択したということだろう。

それはまた、現在の小学生の若い世代の保護者



入試から大豊山女子中が今春2020年入試の新設した様子。一英語インターナショナル

(ミレニアル世代と呼ばれる)の志向や価値観、行動様式の変化を反映したものである。

現行の「大学入試センター試験」に代わる新たな「大学入学共通テスト」については、大きな変化としては実質的に先送りになった2020年度の大学入試改革だが、その先5年目を迎える2024年度の大学入試からは、本格的な改革が実現することはほぼ間違いない。

この4月から小6になったお子さんたちの学年は、さらに2年後の2026年度の大学受験生。現在の中学2年生以降の世代の子どもたちは、誰もがこうした本格的な大学入試改革の当事者ということになる。

だからこそ、来春2021年入試でも、こうした動きはいっそう加速され、顕著なものになることが予想される。以下にそうした動きとその背景について述べていこう。

### 受験生と保護者の学校選びの志向は“二極化”から“多極化”へ！

この数年、中学受験生のタイプや志向と、私立中学校の人気動向や難易度は、「小学校低学年から進学塾で長期(3年以上)にわたってがっちり受験勉強をして難関校の合格をめざす」タイプの受験生と、「たとえば小学校6年生になってから中学受験の準備を始めるなど、比較的短期・軽度の受験勉強を経て、偏差値や知名度、大学合格実績にとらわれずに受験生本人と保護者の希望や価値観にあった学校をめざす」タイプの受験生とに“二極化”してきたと言われてきた。

しかし、今春2020年入試では、この両極だけではなく、その間に位置するような、「無理のない範囲で、しっかり塾でも受験勉強をして中堅上位校～中堅校を選ぶ」タイプの受験生も明らかに増加した。そういう意味では、受験生の“二極化”から、いわば“三極化”もしくは“多極化”したと表現することもできるだろう。

ただし、そうした“多極化”した価値観や受験準備スタイルの多様化のなかで、ほんの2～3年前と比べても、この先の社会や大学入試の変化を前提として、それに対応できる力を育ててくれる

「新たな教育」に注目や期待を寄せる保護者が年々増加していることは明らかだ。

今春2020年入試の直後に行った、模試会場での入試情報保護者会の講演者による「入試総括コラボミーティング」のなかでは、「英語4技能」、「グローバル教育」、「ICT教育」、「探究学習やPBLなどのアクティブラーニング」などの教育展開は「すでに私立中高の“標準装備”になっている」と述べた方もいた。

これらの新たな教育は、もはや多くの私学にとっては当たり前で、そのなかで保護者は「どの学校の新たな学びが本物で、わが子を伸ばしてくれる学び方なのか？」という視点で学校を選ぶようになってきているということだ。

進学校として定評のある男子校のなかでも、海城や巣鴨、城北、成城、聖学院などのように、積極的に新たなグローバル教育のプログラムや、ICT活用のための環境や授業を整えつつある学校が今年には人気を高めたことも、上記のような傾向の反映といえることができるだろう。

一方では、来春2021年から中学も共学化する芝浦工業大学付属をはじめ、昨年から「算数1科入試」を導入した大妻中野や、すでに「プログラミング入試」を導入した大妻嵐山、相模女子大学中学部、駒込、聖徳学園、八王子実践、聖和学院のように、中高でのプログラミング教育を含む「STEAM (STEM) 教育」を積極的に展開し始めた私学にも注目すべきだろう。

## 小学生と保護者の選択肢を広げた 私立中入試の多様化！

そうした、受験生と保護者の学校選びの志向や価値観と受験準備のスタイルが“多極化”してきたなかで、「私立中入試の多様化」も、いっそう注目されるようになってきた。

その私立中の多様化した入試の形態は、「適性検査型（公立一貫対応型）入試」をはじめ、「合科目・総合型入試」、「記述・論述型入試」、「PISA型入試」、「思考力入試」、「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」や「英語（選択）型入試」など、バリエーションは多岐にわたる。それ以外



聖和学院中が今春2020年から新設した「英語プログラミング入試」。大きな反響があったという。

にも「得意科目（1科・2科・3科）選択型」や、従来から存在した「帰国生入試」や「推薦・第1志望入試」の増加も昨年以上に目立っている。

そのなかで今春2020年入試のトピックであり、来春2021年以降の入試でも増加が予想されるのが、先にも紹介した「プログラミング入試」と「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」だといってよいだろう。

プログラミング教育は、この4月から小学校で全面实施となった新『学習指導要領』のなかでも必修化と解釈されているし、プレゼンテーションの力は、いま日本の教育の課題とされ、今後の大学入試における各大学の個別入試でも問われる力のひとつとして挙げられている。

そして、こうした新タイプ入試が導入されることで、進学塾で私立中受験のための勉強をしてきた受験生だけではなく、多様な学校生活や活動歴・学習歴（習い事やスポーツなども含む）を経てきた小学生が、私立中を受験～進学することができる入試形態と選択の機会が広がった。

つまり、多くの私立中が、こうした多様なタイプの入試（＝多様な受験生を迎え入れることのできる入試）を、新たな受験生と保護者との“出会いの機会”として、また今後の日本の教育や大学入試の変化に対応した自らの教育姿勢を反映する“メッセージ”として導入したのである。

そうした意味では、この「日本の教育と大学入試」が大きく変わろうとしている時期に、この変化に先駆けて、中学入試で問われる学力観や入試観そのものも変化し、入試形態も多様化したことになる。それならば、多様な学力や才能を持つ小学生にとっての「チャレンジできる機会が広がった」とポジティブに受け止めてよいはずだ。

現にこうした多様な新タイプ入試を新設・導入



## 2020年の首都圏中学入試トピック！《第1弾》

～「2024年度以降の大学入試改革」に先駆けて、中学入試の人気動向に「変わる大学入試と日本の教育」の影響が反映！～

今春2020年の首都圏中学入試で目立った動きと傾向を以下にご紹介しておこう。

### 《2020年入試の全体的なトピックス》

【従来型4科・2科入試。午後1科入試】

#### 1. 最難関・準難関校の多くが志願者増

都内では男子進学校の多くが志願者増

◆男子校では開成・駒場東邦・武蔵・聖光学院、女子校では桜蔭・雙葉・洗足学園・豊島岡女子学園・浦和明の星女子、共学では渋谷幕張（男子）・市川（男子）・栄東など各地の最難関校が志願者増。麻布、女子学院の志願者もほぼ前年と変わらず。

◆海城・攻玉社・巣鴨・世田谷学園・城北・成城・高輪など都内男子進学校の大半が志願者増。

#### 2. 有名大学付属校の人気傾向は続く

芝浦工大附属、法政・日大付属校も！

◆この数年続いてきた有名大学付属校（とくに男子校）人気は今年も一部に継続。早稲田中・慶應普通部・学習院・立教池袋・日大豊山などの有名大学付属校が志願者増。

#### 3. 校風・カラーの色濃い女子校が志願者増

新設午後（算・国1科）入試は高人气に！

◆恵泉女学園や香蘭女学校、晃華学園、清泉女学院など、プロテスタント系・カトリック系のミッション・スクールや、日本女子大学附属、桐朋女子、女子美術大学付属など、校風・カラーの色濃い女子校が志願者増。

#### 4. 共学ニューウェーブ校は人気高止まり

一部が男子校・女子校にシフトか？

◆三田国際学園・広尾学園・開智日本橋学園・東洋大京北など、これまで人気を高めてきた共学ニューウェーブ校の志願者は高止まり。

#### 5. 「思考力」「表現力」を問う出題が増加！

男子校の国語で女子の気持ちを考えさせる出題も！

キーワードは多様化か？～今後の大学入試改革の方向性が反映～麻布をはじめ、難関男子校の国語の出題で「女子の気持ちを考えさせる」素材分や出題が目立つ。今後の社会に求められる“多様化（＝ダイバーシティ化）”を意識させる出題か？

#### 6. 算数1科・国語1科(1科特化型)の大人気

1科・2科・3科選択(得意選択型)の人気増

◆2019年入試で新設された世田谷学園・巣鴨、普通士学園、栄東の「算数1科」入試に続いて、今春2020年入試では、田園調布学園、湘南白百合学園、富士見など女子校の算数1科入試に代表される新設午後入試（算・国1科）が今年も高い人気に！共学校では啓明学園の算数1科午後入試も。

#### 7. 私立中入試の多様化が進むなか、

今年も「得意科目選択型入試」が人気増！

そのなかにもバリエーションが広がり、4科から3科、英語を含む5科から3科、4科から2科、英語を含む5科から1科などの、多彩な得意科目選択型入試が人気を集める。「算数1科」「国語1科」「英語1科」もそうした得意科目選択の典型例。

#### 8. 私立中の「適性検査型入試」が149校に！

大学入試に先駆け私立中入試が多様化

首都圏の私立中では、公立中高一貫校の適性検査の出題に共通する「その場で考え表現する」力を問うタイプの「適性検査型入試」が、前年の147校から149校に増加（ここには「総合型」「合科論述型」「思考力型」「自己アピール（プレゼン）型」「アクティブラーニング型」など多様な入試も含む）。のべ応募者数は「13,000名以上」に！

#### 9. 私立中の「英語入試」は141校に！

今後必要な「英語力」を保護者が意識

今春2020年入試では、「英語入試」を実施する学校も、前年の125校から141校に増加。今春2020年からの小学校での英語の教科化に先駆けて、英語の4技能が試される今後の大学入試の変化と、グローバルな社会で求められる英語力の必要性を保護者が意識。幼少時から英語学習に励む子どもの増加傾向も反映。

#### 10. プログラミングとプレゼン型入試に注目

来春2021年入試でも増加が予想される！

2018年入試では首都圏で1校（大妻嵐山）、翌2019年入試では4校（相模女子大中学部、駒込、聖徳学園）だったプログラミング入試が、今年にはさらに2校（八王子実践、聖和学院）増えて首都圏で計6校に。

今春2020年度から小学校で全面实施される新「学習指導要領」でプログラミング教育の必修化が謳われているだけに、今後の増加が予想される。

「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」も今後の増加が予想される！

した私立中高一貫校の先生方は、一様に「これまで以上に多様な受験生（小学生）と出会うことができ、記述答案の文章や活動歴、プレゼンテーションなどから、多くの小学生の豊かな資質と“伸び

しろ”を感じる事ができた」と、その確かな手応えを語っている。そうした新タイプ入試を「実施してよかった」と感じている私立中が確実に増えてきたのである。



「思考力入試」実施校の先駆けでもある、かえって有明中のアクティブラーニング型「思考力特待入試」の風景。

せっかく私立中学校の側が、そうした新たな受験機会を設けてくれたのであれば、受験生（小学生）と保護者は、自身（わが子）の得意な教科や強みを生かして、それに合った入試を実施している私立中に、自信を持って挑戦していけばよい。

## 今後の「大学入試改革」の方向性はむしろ若い保護者に歓迎された！

一方で、大学入試改革による先行きの不安から、今春入試では「大学付属校の人气が高まった」などということも一部で言われてきた。

しかし、この「大学付属校人気」の背景には、むしろ大学受験の準備（受験勉強）にとらわれることなく、アクティブラーニングや多様な体験学習などに時間をかけられる大学付属校が、現代の保護者に歓迎されたという面も大きいはずだ。

同じように、今回の大学入試改革と日本の教育改革の方向性が、これまで触れてきた小学生の若い（ミレニアル世代の）保護者には、思った以上に歓迎されているという側面も見逃すことはできない。

何より知識を吸収することが重要で、それが思考力・応用力を高める大前提と考える旧来の「学力観」や、従来のような根強い「学歴信仰」を持たない新たな保護者層には、これまでのように「知識の正確さ」を問われる大学入試よりも、むしろ「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が問われるという今後の大学入試のあり方が歓迎されたという見方もできる。

さらに各大学での個別入試では「創造性・獨創性・芸術性」までを求めるとい

今後の大学入試のあり方に賛同する保護者がすでに数多く存在するという印象さえ受けるのだ。

そうした若い保護者の多くは、自らグローバル企業や、ビジネスの第一線で活躍する働き盛りで、今後の大学入試や新たな教育で求められる上記のような力が必要な時代となっていくことを、肌で感じている世代でもあるからだ。

「わが子が社会に出てより良く生きるための」10数年後を想定して、すでに「その先を見つめる」保護者が増えていると考えるべきだろう。

## 新型コロナウイルスの影響に負けず、気持ちをしっかり持って受験準備を！

この小6第1回「中学受験合判模試」の入試レポートを書いている段階（東京オリンピック・パラリンピック2020の1年先をめぐりにした延期が決定された翌日3/25時点）では、まだ全国の小・中・高等学校の大半は政府からの要請による休校中で、無事に新年度からの学校再開を迎えることができるかどうか、確実な見通しは立っていない。

首都圏中学入試が一段落した2月末から現在まで、私立・国立・公立すべての学校現場は、いま大変なときを迎えている。在校生はもちろん、今春の卒業生や新入生も大きな影響を受けている。何より4月～5月以降の学校をどのように再開～運営していくか現場の先生方は準備を急いでいる。

しかし、そうした状況下でも、多くの私立中学校・高等学校は、独自の工夫と安全対策を考え、休校の間の授業や行事、生徒の学習、健康と安全管理のための方策を実現し、「いま学校に何がで



聖学院中高では、4月13日（月）から全教員が作成した100本の動画授業の配信をスタートさせた！



### 来春2021年以降の入試トピック！《第1弾》

## これからの学校選びと中学入試の未来予測

～公立中高一貫校の増加により、「適性検査型」入試の市場が一挙に拡大へ！～

### ■中学入試は「教科型（4科・2科型）入試」から、徐々に「適性検査型（非教科型）入試」へ！

----- 【2020年】 -----

#### 《茨城県》

茨城県立高校の太田一、鉾田一、鹿島、竜ヶ崎一、下館一など5校が中学募集を開始し公立中高一貫校に。

#### 《千葉県》

千葉大学教育学部附属中学校が、「総合型+プレゼンテーション型入試」を実施。

----- 【2021年】 -----

#### 《東京都》

2021～2022年に都立の併設型中高一貫校5校が高校募集を停止（中学募集定員200～400名増）。2022年に都立立川国際が小・中・高一貫校に。

2021年に都立武蔵・富士が高校募集停止。⇒中学募集定員増。お茶の水女子大附属中が「適性検査」に。

#### 《埼玉県》

川口市立高校が附属中学校の募集を開始し、埼玉県の市立では3校目の公立中高一貫校に。

#### 《茨城県》

茨城県立高校の水戸一、土浦一、勝田が中学募集を開始し公立中高一貫校に。

----- 【2022年】 -----

#### 《東京都》

2022年に都立両国・大泉が高校募集停止。⇒中学募集定員増。※都立白鷗は2021・2022年いずれかより高校募集停止。⇒中学募集定員増。

#### 《茨城県》

茨城県立高校の下妻一、水海道一が中学募集を開始し公立中高一貫校に。

#### 《千葉県》

千葉市立稲毛高等学校・附属中学校が、2022～2027年にかけて段階的に高校募集数を減らし、やがては中等教育学校（完全中高一貫化）へ。

以上のように、今春2020年から現・小学校5年生が中学受験をする2022年にかけて、首都圏では多くの公立中高一貫校が誕生し、あるいは中学募集定

員数が拡大し、公立中高一貫校の「適性検査」＝私立中の「適性検査型（非教科型）入試」の市場が拡大する。

すでに札幌市や岡山県では、県立中高一貫校の受験を希望する小学生が大半になったことで「適性検査型（非教科型）入試」市場が拡大し、従来の私立中の「4科・2科型」入試の市場はこれに準じるような位置づけになっていると言われている。

とはいえ、首都圏では従来の「4科・2科」入試が依然として主流であることには変わりはない。しかし、徐々に中学受験・受験の市場における「適性検査型（非教科型）入試」の比重や位置づけが拡大していくことは間違いないだろう。

わが子の中学受験のスタイルとして、志望校にどちらを選ぶかは小学生と保護者の選択によるが、そうした入試市場の変化のもとで、「4科・2科」で受験できる学校と、「適性検査型（非教科型）入試」＝「新タイプ入試」で受験できる学校の両方を視野に入れて、わが子の受験準備のスタイルと志望校を選んでいくことをお勧めしたい。

### ■川口市立川口高校を母体に来春開校する、附属中学校の校舎は総工費140～200億円！？

来春2021年には、埼玉県で県立の伊奈総合学園、さいたま市立の浦和、大宮市立の大宮国際に続く4校目の公立中高一貫校となる、川口市立川口高等学校附属中学校が開校する。受験できるのは川口市内の小学校を卒業見込みの生徒で、募集定員は男女80名。「適性検査（第一次選考）」実施日は1月16日。

同高校は、市立高等学校3校（川口総合高等学校、川口高等学校、県陽高等学校）を1校に再編・統合し、2018（平成30）年4月に川口市立高等学校として設置された新設校。素晴らしいキャンパスと新校舎が魅力。附属中学校も高い人気を集めることが予想されている。



来春2021年から開校する川口市立川口高等学校附属中学校。かなり大きく予想される（写真は同校HPより）。

きるか？」を突き詰めて考え、コロナウィルス対策の休校下でも、自らの学校の存在意義を見つめ直し、限られた条件下でも生徒のメンタル面を支え、なおかつ成長を後押ししようとしている。

休校後間もなくインターネットを活用した「オンライン授業」を開始した学校も多く、なかには

今号の「私学の魂」コーナーでもご紹介した静岡聖光学院のように、すでに3月初旬から“オンラインでもできる限り学校生活を再現したい”と考え、「オンライン・ホームルーム」や「オンライン・エクササイズ」まで行ってきた私立中高さえある。

私たちが初めて体験する、世界的なパンデミッ

## 来春2021年以降の入試トピック！《第2弾》 芝浦工業大学付属中が共学化

～2/2に午後入試新設。2/1、2/2入試の国・算には聴解（リスニング）問題も！～

### ■芝浦工大附属中が共学化。 同時にダイナミックな中学入試改革も！

芝浦工業大学付属中学校（東京・江東区。男子校）は、来春2021年入試から女子の募集を開始し、2018年に共学化した高等学校に続き、中高とも共学校となる。2016年に江東区豊洲の新キャンパス・新校舎に板橋から校地を移転し、近接する芝浦工業大学豊洲キャンパスとの連携も強化し、本格的な「STEAM教育」の展開を推し進める方針。

学童生徒数の増加エリアの豊洲という立地に加え、共学化でさらに人気上昇することは必至。1学年160名の募集定員を男女で分け合う形になるため、入試レベルも上昇することが予想される。

さらに、2021年の中学入試の形式もダイナミックな改革を予定。2/2PMに「算数と英語」か「算数と言語技術」の



来春2021年から中学も共学化する芝浦工業大学附属中の入試風景。さらには多くの志願者を集め、難化することは必至と予想される。

選択入試を新設。また、2/1と2/2の第1回、第2回入試（いずれも国・算・理の3教科）の国語と算数のなかでは「聴解（リスニング）問題」を含むことも公表している。これまで2年間行われたユニークな形式の第一志望者入試はいったん廃止する。

### ■吉祥女子が、3回入試から2回入試へ！

①2/1は134名募集、②2/2は100名募集。

吉祥女子中学・高等学校（東京・武蔵野市。女子校）は、来春2021年から、これまでの3回から2回に中学入試の回数を減らし、これまで2/4に実施してきた第3回入試の募集定員を2/1の第1回（募集人員134名←114名）、2/2の第2回（募集人員100名←90名）に振り分ける形にすることを2月中に公表した。入試科目や試験時間の変更はなし。詳細は8月上旬に発表の予定。

### ■獨協が2/1に午後入試を新設。

入試科目は国語・算数の2教科で実施

獨協中学校（東京・文京区。男子校）が、来春2021年入試では、2/1に「国・算」2教科による午後入試を新設することを2月末に公表。

これによって獨協中の入試は、①2/1約80名（4科）、②2/1PM約20名（2科）、③2/2約70名（4科）、④2/4約30名（4科）という日程、募集定員、入試科目となる。

この新設の2/1午後入試の集合時間は、第1グループが14:45、第2グループが15:15と公表されている。

クのなかでの学校休校要請のもとで、誰もが危機にさらされ、苦慮しているなかでも、逆にこの機に、学校教育をブラッシュアップしようとしている私立中高が大半だと考えて良いだろう。

休校期間中に、「生徒を登校させなくてもできることは何か？」を突き詰めて考え、この状況下でできることを実現し、一方では、無事に学校を再開できたときには、自校の仲間（クラスや学年、部活の友達や先生、先輩・後輩）が集まるからこそできることの価値とありがたさを見出し、リアルな場の教育をよりいっそう充実させる工夫を多くの学校が必死で考えている。

その意味では、この世界的なパンデミックの危機が、「学校教育のあり方を変える」きっかけになったという見方もできるはずだ。

4月から6年生になり、来春2021年の中学入

試に挑む受験生と保護者の皆さんも、いま自分と家族の健康管理はもちろん、受験勉強の進め方や、学習へのモチベーションの維持など、大変な苦労をしていることと思う。

それでも、この間の苦労や心配、不安やストレスに負けずに、落ち着いて「いまできることを考え」、受験準備を進めていただきたいと思います。そのために多くの塾も、生徒の学習機会と同時に、生徒の安全確保と心のケアをするための様々な工夫をしてくれるはずだ。

「新型コロナに負けるな！」という段階から来春2021年入試に向けての約1年の受験準備をスタートする形になってしまった小6受験生の皆さんに向けて、「この経験が自分を強くした」と思える日が訪れることを心から願い、結びのメッセージとしてお伝えしておきたい。